

## 今、なぜ中学受験か

—— 序にかえて ——

東京都内における「中学受験」の実態を調査テーマにしたそもその発端は、その前年に実施した「小学生の放課後調査」の結果に因ります。この調査は小学4、5、6年生を対象として昭和62年10月に、東京都、岡山県、青森県から無作為に、2,399サンプルを対象に実施しました。これによると、東京都の小学生の6年生の通塾率は、54.0%と他の地域に比べてきわめて高く（因に岡山県36.9%、青森県22.9%）、また通塾の内容においても、中学受験のための塾通いが34.3%もあり（学校の補習のための塾は39.2%）、これも他の地域と大きな差がみられました。昭和63年の文部省の学校基本調査によると、東京都は全国的に見ても、私立、国立中学への進学率が高く、都内の全中学生徒数 486,877人のうち14.4%にあたる69,874人が私立、国立中学校に在籍しています（全国平均では 3.9%）。また今回、私たちが実施した調査においても、子供の34.9%が受験を希望し、また12.6%が検討中としており、約5割が、中学受験を考えているという驚くべき結果となりました。このような中学受験熱の高まりは、東京、あるいは大阪など大都市での特異現象のように見られがちですが、最近では地方都市にも広がりを見せています。

また、平成4年をピークとした18歳人口の低下とともに、私立学校の経営的要求から、中・高一貫教育を掲げる私立中学の新設・再開ラッシュが起きています。

そこで私たちは、直接、子どもたち、そしてその親たちにアンケート調査を実施することによって、その実態を子供や親の側から、つかみたいと思いました。

また、調査のテーマを明確にするため、アンケート調査の実施の前に、子供たち、ならびに受験希望の母親、公立志向の母親、小学校の先生方にグループインタビュー、あるいは個別のインタビューを実施しました。それによって私たちは次のようにテーマを絞り、問題点を整理しました。

### (1)なぜ中学受験するのか、どういう中学を受験したいのか。中学受験を選択する背景は。

東京都では、高校進学における昭和42年の学校群制度、昭和57年のグループ選択制度以来、「都立の地盤沈下」ということが公然といわれるようになり、いわゆる成績の優秀な生徒の公立ばなれ、私立志向が目立っています。平成元年度の東京大学合格者を見ても、東京都からは1,086名が合格していますが、そのうち都立高校出身者は169名（全体の15.6%）国立の附属高校からは279名、私立高校からは638名という内訳になります。

しかし、中学受験の動機としては単にこのような「高学歴志向」だけでは片づけられない様々な要因が考えられることが、ヒアリングの段階で明らかになりました。即ち、「非行」や「校内

暴力事件」などによる、公立中学への消極的評価、豊かな社会が生み出す私立中学に対するブランド志向的選択、またこれまでの受験システムの回避（即ち、高校、大学受験を子供にさせたくないために、早い時期に私立の小学校、中学校を受験させるというような）が、子供を中学受験に走らせるいくつかの原因として、考えられました。そこで、私たちは、このような中学受験を選択する背景や動機をさらに深く把握したいと考えました。

### (2)中学受験希望者の学校、塾、家庭での様子は、またそれらに対する子供や親の考え方は。

中学受験の大きな特徴のひとつは、それが6・3制という義務教育の中での受験であるということにあります。そのため公立の小学校では進路指導は行っても、受験のための指導はしないことが基本になっています。事前のヒアリングにおいて、児童の9割以上が中学受験をする都内のある小学校の先生が「中学受験指導はしない。受験については受験する子供と親が進学塾に行つて決めている」と述べられたことが強く印象に残りました。9割が受験する小学校においてすら受験に関する指導はしないということですから、ましてや平均的な小学校では推して知ることができます。

また、最近のいわゆる有名私立中学の受験問題を見ると、とても小学校の勉強だけを真面目にやっていたら解ける、あるいは合格点に達するということが不可能といっても過言ではありません（そのことが小学校における授業を破壊していると指摘した先生もいました）。

このようにして、中学受験を希望する小学生は、塾への傾斜を一層高め、小学校と受験塾との二重生活を否が応でも強いられているのではないのでしょうか。もしそうだとするならば、子供そして親たちは、このことをどのように受けとめ対応しているのでしょうか。

### (3)中学受験する子供や親はふだん何を考え、どんな生活をしているのか。

受験を希望する子供、そしてみごと受験に合格し、私立中学に通う子供たちや、彼らの母親たちにもグループインタビューを試みました（その内容は本報告書第Ⅱ部の資料としてまとめてあります。）第一印象でいうなら、子供たちは明るく礼儀正しく、いわゆる「よい子」であり、また母親たちも、これまでの受験ママの悲壮なイメージとは違った、明るさや、華やかさがありました。

受験といえば、暗い顔の受験生とジメジメした家庭のイメージがつきまといますが、こうした「明るさ」や「華やかさ」は一体どこから来るのでしょうか。

また、中学受験は子供が低年齢であるだけに、高校受験や大学受験と比較して、親そして家庭が占める役割の大きさが、相対的に高くなるのが容易に想像されます。受験する子供にとって、

家庭のバックアップなしでは中学受験はまず、成立しないでしょう。そうした子供と親とが一体となった、新しい受験の姿を、明らかにしたいと考えました。

#### (4) 中学受験を成立させる社会的背景は何か。

言うまでもなく小学校教育は義務教育で授業料は無償であります。しかし、中学受験に進学塾が欠かせないとするならば、受験をさせる家庭は、そうでない家庭より教育費の負担が重くなるのが想像できます。有名な進学塾においては、月に平均すると一人当たり5～6万円かかり、夏期講習や冬休みの講習のためにさらに教育費がかさむことになります。つまり、仮説として、こうした教育費の重圧に耐えられる社会的な条件にあるかどうか、中学受験への参加を決定する大きな要因になるのではないかと考えられます。

そこで本調査では、そうした社会的な背景、要因までさらに突っ込んで考えることにしました。

今回の調査のテーマは義務教育のなかでの受験という、非常にデリケートな問題であり、調査の段階においては様々な困難もありました。それだけに、中学受験に関する子供、そしてその親に対するアンケート調査は重要な意義があったと思います。

今回の調査にご協力頂いた方々にはこの場をかりまして心より感謝を申し上げます。

今回の調査の結果が、子供たちにとって、またよりよい教育環境を願う人々にとって、お役に立てれば幸いです。